

## ギリシャ・ミステリの父ヤニス・マリス —その魅力と変遷—

橘 孝司

### 1 はじめに

2010年4月「ギリシャ・ミステリ作家クラブ Ελληνική Λέσχη Συγγραφέων Αστυνομικής Λογοτεχνίας (Ε.Λ.Σ.Α.Λ.)」が結成され、今年で五周年を迎えた。参加する作家は25名から41名に増え、様々な記念活動がおこなわれている<sup>1)</sup>。

これらの作家たちが「ギリシャ・ミステリの父」として等しく認めるのが、1950年代から二十年以上にわたって活躍したヤニス・マリス Γιάννης Μαρής である<sup>2)</sup>。処女作から六十年以上経った今日でも、ほとんどの作品が再版され愛読されており、かつ埋もれた作品や研究書も近年出版されている。

本稿は代表的ないし特徴的な作品を五つ取り上げ（五十年代から二つ、六十年代から二つ、七十年代から一つ）、わが国であまり知られていないその作品の特色と魅力を分析する。マリスの作品の基本スタンスは処女作以来変わることはないのだが、後年の作品にはいくらかの変容が見られることにも言及する。

### 2 マリス以前

ミステリの趣向を盛り込んだ文学作品はもちろんマリス以前にも存在する。純正語世代の作家で言えば、近代ギリシャ短編小説の父ヨルギオス・ヴィジイノスには「わが母の罪」や「誰が我が兄を殺したのか」（ともに1883）がある。前者の「罪」は έγκλημα ‘crime’ではなく、αμάρτημα ‘sin’であり、事故からわが子を死なせてしまった母親の異常な行動が描かれる。後者は、復讐と錯誤の殺人が入り組んだ出来事を時間軸に沿ってではなく、真相が最後に明らかになるよう、ミステリ風に構成している<sup>3)</sup>。風俗小説 ηθογραφία の巨匠アレクサンドロ

ス・パパディアマンディスの「女殺人者」(1903)では、社会に隷属する地位に幻滅し、異様な妄念から犯罪を続け、最後に破滅する主人公が描かれる。が、そこでは謎の解明というより、罪と贖いの問題が主軸となる。

ギリシャ・ミステリ年表の最初に置かれるのは、民衆語世代に属するパヴロス・ニルヴァナスの中編「プシヒコの犯罪」(1928)である<sup>4)</sup>。とはいえ、確かに殺人事件に始まり、警察の捜査、逮捕拘留、裁判、刑執行などが描かれるのだが、事件は論理的には解明されず、作家の眼目は、現実と空想の境界が曖昧なあまり自分が犯人だと妄想してしまう主人公の心理や、舞台となる1910年代アテネの様々な階層—上流階級のサロンから獄中生活まで—の描出にある<sup>5)</sup>。

これらは純文学の側がミステリ風趣向を取り入れたものだが、ミステリや冒険など娯楽文学を専門とする廉価雑誌は大戦間に現れ始める<sup>6)</sup>。1935年、アメリカのパルプマガジン「ブラックマスク」に触発された「仮面 Μάσκα」と「謎 Μυστήριο」が創刊された。占領期に一時廃刊になるが、戦後再刊され、1950年代から1967年軍事政権崩壊の時期にかけて黄金時代を迎える。他にも多くのミステリ雑誌が出現したが、この二大雑誌の影響は大きかった<sup>7)</sup>。最初は欧米作品の翻訳が中心だったが、やがて自由な翻案ものが書かれるようになる。読者がミステリを渴望する中でヤニス・マリスは登場し、ギリシャの街角を活写した娯楽作を矢継ぎ早に発表することで、ミステリの地盤を広げていった。

### 3 ヤニス・マリスの横顔

マリスはもともと職業作家を目指していたわけではない。まずジャーナリスト、雑誌編集者であり<sup>8)</sup>、それ以前にはドイツ軍占領期に左派の闘士としてレジスタンスで活動した行動の人だった。

ヤニス・マリス、本名ヤニス・ツィリモコス Γιάννης Τσιριμώκος は1916年スコペロス島に生まれた。文豪パパディアマンディスを生んだスキアソス島の隣の島である。文学史的には「戦後派」とされるアンドニス・サマラキス(1919年生)、ディミトリス・ハジス(1913年生)らと同世代になる<sup>9)</sup>。この世代は第二次大戦中の独軍占領や内戦という苦難の時代を生き、その直接体験を文学に昇華させた作家たちである。

マリスの父は判事であり、従兄弟には、後に総理大臣になった政治家イリアス・ツィリモコス Ηλίας Τσιριμώκος がいる。幼年期は中部地方のラミアで過ごし、テサロニキ大学で法学を学ぶが、在学中社会主義思想に共鳴し、左派学生のリーダーとなる。第二次大戦のドイツ占領期には、「人民民主主義同盟 Ένωσις

Λαϊκής Δημοκρατίας (ΕΛΔ)」を指揮していたイリアス・ツィリモコス、アレクサンドロス・スヴォロス Αλέξανδρος Σβώλοςとともに山中でのレジスタンスに加わり、共産党等とともに結成した左派連合の抵抗組織「民族解放戦線 Εθνικό Απελευθερωτικό Μέτωπο (ΕΑΜ)」の幹部となっていく。

戦後はΕΛΔから改称した「社会党 Σοσιαλιστικόν Κόμμα- ΕΛΔ」の機関新聞「マヒ Μάχη」の編集長になる。時事問題以外に映画批評も担当（後の20本あまりのシナリオ執筆につながる）。他にもさまざまな新聞雑誌に記事を書いた。

1949年、マクロニソス島の強制収容所の実態を素っ破抜いた事件で投獄されたが、社会主義インターナショナルの尽力で釈放される。

1953年、一般向けの週刊誌「家族 Οικογένεια」に本名で「コロナキの犯罪 Έγκλημα στο Κολωνάκι」の掲載を開始、好評を博し、三ヶ月間連載の後にアトランティス社 Ατλαντίς から書籍出版される。翌年には早くも第二作「楽屋の犯罪 Έγκλημα στα παρασκήνια」(1954)が、ヤニス・マリスの筆名で<sup>10)</sup>、ボツィス Μπότσης 社の新聞「アポイエヴマティニ Απογευματινή」に<sup>11)</sup>、さらに第三作「信頼の問題 Ζήτημα εμπιστοσύνης」(1955)が同社の別の新聞「アクロポリス Ακρόπολις」に連載された<sup>12)</sup>。この二作も完結後同じ出版社から本として出る。以降、マリスのミステリ作品は大部分が「アポイエヴマティニ」「アクロポリス」の二つの新聞紙に連載された後、アトランティス社から出版という過程を経ることになる。

多作家マリスは年間2~3作（最多は1956年の6作）という速いペースで作品を発表、1978年の最後の「誘拐 Η απαγωγή」まで68作（長編46、中編16、短編6）を書きあげ<sup>13)</sup>、文字通り「ギリシャ・ミステリの父」となった<sup>14)</sup>。

そのミステリ作品は50年代に早くも映画化され、マリス作品の知名度をいっそう上げることになる<sup>15)</sup>。

1960年にはボツィス社の「プロト Πρότο」誌の編集長になり、1978年に退職するまで35年間ジャーナリストとして腕を揮い続けた。1979年63歳で永眠。

#### 4 処女作「コロナキの犯罪」(1953)

内戦が終結し、右派政権の許で外国資本の援助により復興が進む五十年代初め。人口の流入で都市は膨張し、富を持つ者と庶民との格差が広がっていく。

アテネの裕福なコロナキ地区に鳴った一本の深夜電話から、ヤニス・マリスの小説世界は始まった。

電話は三度鳴った。カルネジスはまだ半ば眠りこけながら、手を伸ばし受話器を取った。

向こうから聞こえる声は息を切らし急いでいる。「んん？」眠気が取れぬままカルネジスは言った。反対の手でスイッチをつけると、明かりが豪華な寝室に溢れた。整理筆筒の時計は三時を指していた。(p.7)

電話は画家カルネジスの知人フロラスからで、妻ジャネットのことで話があり、今から会いに行くと告げる。カルネジス家の小間使いがフロラスを招じられる。その後訪問者は去るが、早朝ヘルメス像で撲殺された死体が見つかる。捜査は管轄である第三分署主任のベカス警部に託される。ベカスは前夜のアメリカ大使館強盗事件の捜査で睡眠不足、おまけに風邪気味の冴えない姿で初登場となる。

「いやな天気だな」

「いやな天気ですね、警部」

ベカス警部はハンカチを取り出した。このところ風邪に付きまといわれているうえに、昨夜の徹夜のあと必要なものと言えば、お茶と寝床だった。(pp.15-16)

警察は、三角関係の纏れからフロラスが年下の妻ジャネットの愛人カルネジスを殺害したと見て、捜査はひとまず終了する。ところが、フロラスの息子ディミトリスが海外から帰国、父の無実を晴らすべく、知り合いである新聞社「プロイニ」の編集長マクリスと文化部記者デリオスの協力を得て、独自に事件関係者たちを調べ始める。調査が進むうちに容疑者が次々と現れ、動機展覧会の相をなしてくる。

まず怪しいのはジゴロのジョニー。彼もまたジャネットと愛人関係にあり、カルネジスの遺産にありつく可能性がある。次に、旅行会社勤務のミルトは、戦時中カルネジスの裏切りにより父を殺された遺恨を持つ。三人目は、カルネジスがフランス遊学中に知り合い恋人となったジュリエット。彼を追ってギリシャへやって来た。現在はカルネジス家で家政婦をしているが、心変わりをした元恋人を恨んでいる。さらに、カルネジスが密輸団の金庫番であることが明らかになり、分け前を要求する団員も容疑者として浮かび上がる。こうして混沌とした状況の中で、口封じのためか、容疑者が殺されていく。

テンポの速いスリラー型のミステリで、四件の連続殺人が起きながら、犯人の正体は最後まで隠されている。よく知られた古典的なトリックが使われており、ミステリを読み慣れた人なら気づくかもしれない。しかし、次々に現れる容疑者たちの人間関係がストーリーを牽引していくので、それに身を委ねて頁を繰っていく方が楽しめる<sup>16)</sup>。合間にはマクリスとデリオスの推理が挿入され、事件の全体像と謎の所在をまとめてくれる。さらに、共犯者の跡を追ってアテ

ネ中心を駆け廻り、ピレアスの隠れ家に迫る追跡劇や、アテネやピレアスで犯人を罠にかける捕物劇も、それぞれ二度ずつ挿入され読者を飽きさせない。ある共犯者が口封じのため殺害されるシーンなど通俗スリラーの典型であるが、読まされてしまう。

彼女は恐怖に襲われ立ち上がろうしたが、相手は鋼のような指で彼女の手を掴み、無理やり押さえつけた。

「残念だね」

彼女はもう一度相手をまともに見た。その時、真実が、恐るべき真実が頭に閃いた。この人は狂ってる！いかれてる！

もう一度立とうとした。海が傍にあり、足を濡らしていた。相手の手が喉に感じられた。

「やめて…」 (p.148)

後の作品で、作者の分身である登場人物が「僕は作家じゃない。ジャーナリストだ。読者を楽しませるために書いている<sup>17)</sup>」と言う通り、娯楽に徹した作りになっている。テンポの速い展開、動機を核とする人物関係、事件の推理、追跡・捕物の活劇などスリラーの定番要素をふんだんに取り入れ、お馴染みのアテネの街角を主人公たちに駆け廻らせることで、読者を引っ張って行く。こうして、マリス流の通俗国産ミステリが生まれることになった。

作風に加えて、「仮面」「謎」のようなマニア向けの、しかも風紀を乱す娯楽雑誌として親に受けの悪い雑誌ではなく<sup>18)</sup>、一般向けの週刊総合雑誌に掲載されたこともミステリの間口を広げるのに役立ったはずである。逆に言えば、そういう読者層、発表媒体に合わせて、通俗ミステリの要素・構成を取り入れたとも言える。書き下ろしの本であれば、立ち止ってじっくり事件を考えることになろうが、週刊誌に連載された読み物である。ストーリー展開の面白さによって最後のページまで読者を魅了し続けることを最優先に作られている<sup>19)</sup>。端的に言えば「(マリスは) 本の作家ではなかった」(Αποστολίδης 2012:118)。

#### 4.1 軽快な文体

作品を読みやすくしているのは、なんと言っても読者に負担をかけない軽快で簡潔な文体である。平易な語彙の短文が連なって事件が描写されていく。このような文体はスリラー場面に最も効果を発揮する。

その瞬間、扉の扉が軋り音をたてた。誰かが入って来た。足音が中庭に響く。警官たちが外へ飛び出し、まもなく震える男を連れて戻って来た。古いカーキ色のシャツを着ていた。穴だらけの靴が紐で素足に縛り付けてある。頭にはくたびれた帽子が載っていた。ひどく

怯えているようだ。(p.139)

会話もまた短い文の積み重ねである。一語文も少なくない。

「アンナ、ご主人は何時に出かけた？」

「あなた方のすぐ後です」

「帰って来ると言ったのかね？」

「いえ、何もおっしゃいませんでした。」

「荷物は持って出たのか？」

「いいえ」

…「君が車を呼んであげたのかね？」

「いいえ」

「一人で出かけた？」

「はい」

「我々も出るとしよう」マクリスが言った。(pp.132-133)

事件を推理する際は多少饒舌になるが、複雑な文構造にはならない。

デリオスは言った。

「それでも、だ。二人のうちのどちらか、あるいは未知の誰かがカルネジスを殺したとしよう。しかし、どうやって殺した？いつ？これこそが基本的な最大の問題だ。まずこれを解決しなければなるまい」

マクリスはパイプを口から離しながら、

「馬鹿なことを。あの夜ヘルメス像で頭を殴って殺したんだよ。誰だって知ってることだ」

「その通り。だが、どうやって？残念ながら、ただ一人の夜の訪問者は君の父上だ、ディミトリス。さらに、ジョニーにしろ、カプシスの娘にしろ、或いは未知の誰かにしろ、殺人の夜に画家と接触したという証拠はない。ましてや、彼らが画家の家を訪れるのをも見た者もない。それに、二人のうちどちらかが家に行ったと仮定してみよう。どうやって入ったんだ？」(p.90)

このように、文体が極度に軽快であるため、読者にとっては負担を強いられることなく手軽に読め、作者としては日刊の新聞連載でありながら、作品を（時に同時進行で）次々と生み出すことができた。

## 4.2 ヒーロー像と主人公

ギリシャ人探偵の代名詞となるベカス警部は<sup>20)</sup>、ジョルジュ・シムノンのメグレ警部をモデルにしたとされるが、冴えない初登場といい、ほとんど描写されない外貌といい、ヒーロー像には程遠い。その分、読者の共感が得られる存

在である。庶民派、子煩悩な家庭人で、同僚からは信頼されている。

「家のほうはどうかね？おちびちゃんは？」

ベカスは微笑んだ。娘は一番の弱点だった「元気ですよ。まあ、今時の女の子は変わって  
ますが。」(pp.20-21)

ベカス警部は率直で信頼できる、自分のやり方を心得た、少しばかり昔かたぎの人物だ  
った。検事は彼に共感を持っていた。(p.25)

実際、この検事マヴリディスの方がよほど名探偵らしく見える。

警部はこの上司を尊敬していた。深い知性の人だ。(p. 20)

検事の冷静さはいつもベカスを少しばかりいらだたせた。が、同時に羨望を感じ、賞賛し  
てもいた。(p. 22)

対照的に、ベカスの方は、能力ある人物には敬意を示す謙虚で物腰の低い人  
物ということになる。

ただ、その信頼感にもかかわらず、実は職務上よく失敗している。カルネジ  
ス事件は後から考えると、ベカスの初動捜査の誤りに起因するところが大きい。  
また、中段で犯人を追いつめながら包囲網を突破されてしまうし、応急措置を  
怠ったため証人を死なせてもいる。三カ月の連載途中で事件が解決しないよう  
に作者マリスが取らせた措置とは言え、登場人物ベカス警部には気の毒なところ  
である。(この失敗苦汁の連続は後年の「恐怖の夏」で頂点に達する。)

だが、問題は処女作中でのベカス警部の役割である。いったい彼は主人公な  
のだろうか？実はこの時点では、後の作品での方向性がそれほど固まっていな  
かったのではないか、という印象を受ける<sup>21)</sup>。何より、ベカス警部は冒頭の捜  
査で現れるが、公式捜査が終了した後(全八章中の第二章)しばらく姿を消し、  
後半(第七章)まで出てこない。代わりに中段で事件を捜査するのは、ディミ  
トリス青年、新聞社編集長マクリス、文芸部記者デリオスである。ディミトリ  
スは捕われた父というストーリー上の必要性を持って登場するのだが、怪しい  
人物を追いかけて捜査活動を担当するし(第五章)、推理合戦を繰り広げるのは  
マクリスとデリオスである(第五章)。さらに、学究肌のデリオスがある場面で  
は容疑者を追ってタクシーを走らせ、格闘を繰り広げる(第七章)。ベカスは後  
半(第七、八章)、犯人捕獲作戦でようやく再登場。事件を議論検討し、真犯人  
を見抜くのはベカスとデリオスであり(第八章)、中盤活躍のマクリスはクライ  
マックスの大捕物にも参加せず、いまだ真相に達していないらしい。このよう  
に、各人物の主人公たる資格や分業体制が揺れている。

古典ミステリが超人探偵と凡庸な助手のコンビでやりくりしてきた点を思い

合わせると、探偵役が多すぎて、ベカスがいなくても事件そのものは解決しそうである。「容疑者がいっぱい」に加えて、「探偵もいっぱい」の観がある<sup>22)</sup>。

ちなみに、無能だが傲慢な警官という、お馴染みの人物もちゃんと準備されている<sup>23)</sup>。

### 4.3 外面描写と心的独白

上質の娯楽作を提供することにこだわった結果として、作者は作品に制約を課している。話の流れを妨げるような、ストーリーに直接かかわらない部分は大胆に省かれている。それはまた娯楽至上主義の限界でもあるし、多くの読者はなくてもいいと感じるかもしれない。マリスの作風を特徴づける、そのような制約を三つ挙げておきたい。

まず、人物の外面描写が極度に簡潔な点である。初登場にもかかわらず、主人公ベカス警部の容姿など、ほとんど描写されない<sup>24)</sup>。相棒マクリスの方が少しましな程度に触れられる。

快活な青い目が太い柄のメガネの奥で、英知に溢れ輝いていた。…マクリスはジャケットを着ていた。指で逆立った金髪を撫でつけると、白髪が隠れた。(pp.40-41)

しかし、処女作ゆえに人物描写を敢て淡白にしておいたというより、もう少し根本的な問題がここにはあると思われる。それは被害者や容疑者となる上流階級の人物の描写を見れば明らかになる。

三十にはなっていないようだ。みごとな仕立ての夜会服を着ていた。シャツは一点の染みもない白。黒髪が緩やかにウェーブし、浅黒い端正な顔を飾り立てている。しかし、隙のない外貌には何か苛立たせるものがあつた。おそらく、着こなしがいいと言うには余りにもエレガントだからだろう。そして真白い歯並びによって際立つ浅黒い美貌には、微笑みが浮かんでいるが、誠実さが欠けていた。若く鍛錬された身体の強靱な筋肉が衣服の下に線を描いている。中背だが驚くほど均整がとれており、実際より高く見えた。(pp.35-36)

サロンのドアのところに女が一人立っていた。かつては美しかったのだろう。体の線に合った黒い服を上までピッチリと着こんでいる。白いものが混じり始めた黒髪を、頭の周りできっちり結っていた。(p.21)

つまり、なおざりなベカスの描写に比して、被害者や容疑者の外貌の描写の方に力が入られるのである。

加えて、彼らの住まいの描写にも筆が割かれる。

カルネジスはベッドから起き上がり、シルクのパジャマの上に英国製の布地の厚いローブを羽織った。この夜の電話に彼は狼狽し、広々とした部屋の中を不安に歩き回った。手



入れの行き届いた絵画が壁を飾り、厚い絨毯は足音をかき消した。(p.8)

マリスが描こうとしているのは、金や権力を蓄積し、拝金趣味と俗物性に満ち、退廃した上流階級の世界である<sup>25)</sup>。コロナキは内戦期に左派によって占領されることなく、右派・政府軍に守護された富裕層の象徴だった (Αποστηρίδης, 2012:88)。これに対峙する庶民の世界、読者の側の象徴としてベカスは登場する。

裕福な部屋を飾る、これら全ての豪華な絨毯、高価な調度品、レースの数々、優雅な美術品の中では、ベカスの赤ら顔は不協和音となっていた。(P.25)

ジャネット・フロラはそばの低い小卓から煙草を取り出し、…口にくわえた。ベカス警部は小さな安物のライターで火をつけてやった。(p.26)

このような上流階級に投げ入れられるならば、庶民ベカスの存在は「不協和音 παραφωνία」でしかない。煌びやかな表面の上流社会を描くためにベカス自身は黒子になり、「小柄で太り気味」程度で片付けられているのである。

外面描写の対比だけではなく、内面の独白もこの目的に使われる。ろくに外面描写されないベカスが、次のような激烈なことばを心内に吐く時、その落差に驚かされる。

第三分署の責任者は最初から、この女に反感を感じていた。ただ美のためにのみ生き、その彼女のせいで一人の男、彼女の友人が命を落とし、もう一人の男、夫は破滅したのだ。(p. 27)

女たちめ！ベカスはそう思うと、太った赤ら顔の眉をひそめた。愚かにも満足することを知らない、軽薄な女たち。ある怒りが膨らみ始めた。男が一人亡くなり、もう一人は身を滅ぼした。なぜ？なぜなら、この女はすべてを手にしていながら、さらなる快樂を人生に加えようとしたからだ。(pp. 29-30)

警部は今や反感以上のものを感じていた、この恥知らずの人形に憎しみを感じていた。女は無罪だった。法律の点では無罪だった。無罪だと！警部は唾を吐くかのように半ば唇を開けた。ジャネットは怯えながら彼を見ていた。無罪だと！昨夜の犯罪に罪がある者がいるというならば、彼女こそ有罪だ。(p. 30)

華やかな世界の表層を眺めながら、その軽佻浮薄な内実への反感を語る筆者の代弁者。黒子のベカスはその役割を担っている。外面描写の簡潔さは、娯楽性の追求だけではなく、その役割ゆえであると思われる。

#### 4.4 人間関係の描写

次に、人間関係の描写についての制約に触れたい。犯罪をめぐる被害者と容疑者間の人間関係は詳細に示される。ジャネットとジョニーの愛人関係、カル

ネジスへのジュリエットの恨み、ミルトの父に対するカルネジスの裏切りなど、いずれもストーリー展開に必要なからである。同時に、上流階級の墮落した人間関係が炙り出されることにもなる（ジャンネットをめぐる三角関係など）。しかし、これに関係のない庶民の側の家族のつながりなどは思い切り削ぎ落とされている。

ベカス家の食事風景（第七章）など、庶民性の表現にはなっているが、個人的に調査をしてきたマクリスが、いったん捜査を終結させた警察官ベカスを訪ね事件を再検討するという、ストーリー上必要な場面として機能している。ベカス夫人は好意的に描かれるが非常に簡潔。十六歳の可愛い娘も同席するが、母子ともに名前さえ紹介してもらえない。

最も気にかかるのはディミトリス青年と父親フロラスの関係である。そもそもディミトリスが事件にかかわるようになったのは、殺人罪で拘束中の父を救うためだったのだが、途中でその件は忘れられてしまい、容疑者の一人であるミルトと恋仲になって、花のアテネを腕を組んで闊歩する有様である。留置所での父との会見なども全く描かれない。最後に事件はすべて解決し、二人の恋は実るのだが、父親フロラスのことは、デリオスが「お父上の苦難もこれで終わりだ。数日後に釈放されるだろう（p.230）」と一言で片づけている。

作者マリスはこれが気になっていたのだろうか。後のある作品では父子の愛情がしつこいほどに描かれることになる。

#### 4.5 現実社会への言及

最後の制約は、同時代あるいは近過去の深刻な歴史現実、政治的事情は直接持ち込まないという点である<sup>26)</sup>。すでに学生時代に社会主義に共鳴し、占領下でEAMの幹部としてレジスタンスにかかわり、戦後もジャーナリストとして健筆をふるった以上、マリスには強い政治的信条があるはずだが、それを娯楽作品に正面切って持ち込むことはしない。同時代の戦後派作家たちにとって、1930年代以降のギリシャ・イタリア戦争、独軍占領、内戦などは避けて通れない素材対象である。しかし、これらの純文学とは対照的に、正面切った取り扱いをマリスは封印している。作品が通俗娯楽作品として成り立つためには、これは必要な措置であろう<sup>27)</sup>。

たしかに、容疑者の一人は、第二次大戦中にエジプトで対独抵抗活動をしてきた父親がカルネジスの裏切りで殺されたため遺恨を抱いているのだが、それ以上はストーリーに絡まない。それどころか、その恨みは途中でどこかへ飛ん

でしまう。それ以外の容疑者の動機はいずれも古典ミステリが描いてきた、金銭か愛憎に絡んでいる<sup>28)</sup>。

このように、処女作では読者サービスを第一とし、その妨げになる要素は敢て制限されている。この娯楽第一の姿勢は生涯変わらない。

しかし、後の作品を読むと、娯楽の表面の奥にある作家の信条、現実社会への論評が少しずつ滲み出てくるのが見られる。その点を以下の節で見ていくことにする。

## 5. 占領期への言及、「楽屋の犯罪」(1954)

第二作「楽屋の犯罪<sup>29)</sup>」は、処女作の翌年三カ月にわたって日刊紙「アポイェヴマティニ」に連載された。マリスが熟知していた演劇界を舞台とし<sup>30)</sup>、冒頭から怪しげな人物が徘徊する。

その人物は大劇場の外で少し立ち止まった。照明が点滅していた。赤、緑、黄。午後の雨に濡れたままのアスファルトの道路の大部分を、すでに車の群れが占めていた。全てが初日公演の成功を約束しているかのようだ。その人物はしばらくためらってから、照らされた入口へと向かった。(p. 7)

幕が上がる直前に、主演女優ローザが殺される。傲慢な彼女を中心として、事件の底に流れる厄介な人間関係の描写に力が注がれ、一癖も二癖もある俳優たちが容疑者として現れる。「コロナキの犯罪」同様、被害者は悪辣な人物で、恋人を奪った、主役の座を盗った、肉親殺害の原因を作ったなど様々な動機が発生するように設定されている。事件が進むに連れ、冒頭の謎の人物の正体や、失踪した容疑者の理由、容疑者間の恐喝などが暴かれていく。

ミステリの趣向としては「密室殺人」が前面に押し出されている。ローザは自分の楽屋で刺殺されており、ドアは内側からカギがかけられている。ベカス警部は現場を調べながら、秘密の通路、採光窓からの侵入、飛び道具、早業殺人などの可能性を検討していくが、真相に辿りつけない。自棄になって記者に「殺人光線で殺したんだよ (p.35)」とつぶやく始末である。

事件の舞台は「コロナキの犯罪」より広がり、アテネの国立劇場を出発点に、中部の町ラリサ、さらに北部のテサロニキへと展開していく。クライマックスはテサロニキの避暑地カラブルナキで派手な銃撃戦となる。

第二作も軽快な文体に娯楽性満載で楽しく読める。タクシーでの追跡、隠れ家で犯罪者たちが交わす密談の盗聴、ベカス率いる捜査隊がじわじわと真犯人を追いつめる捕物劇も再び味わえる。スリラー場面で作者の筆はことに冴える。

できるだけ物音を立てないようにして近づき、女優が入った家の外で立ち止まった。低い軒家で、近所のどの家も似たようなものだ。古い鎧戸の低い窓から明かりが少し通りに漏れている。若者は近づいた。心臓が胸の中で飛び跳ねる。突然ドアが開いて捕まってしまったら？もう一度周囲を見た。誰もいない。やってみるべし。鎧戸の隙間から覗いた。最初に女優が見えた。誰かと話しているが相手の顔は見えない。聞き耳を立てたがうまくいかない。(p. 114)

ただ、ストーリーの結束性やミステリの趣向の点では「コロナキの犯罪」の方が上のように思う。主人公性の分裂は「コロナキの犯罪」以上で、ベカス警部は全編に登場するわけではなく（現れるのは第二～三、五、八、十三～十五章）、動機の解明の調査はマクリスが行っている（第四、六～十二、十六章）。実は二つの犯罪が絡み合っているのだが、ベカスとマクリスがそれぞれ別個に解決している。連載スケジュールの制約からか、解決部分は最後のわずか4ページ。また、Αποστολίδης (2012:144)も言う通り、前作と類似したトリックが使われすぐに気づいてしまう。

問題の密室の謎は、古典ミステリを茶化しているのかと思うほど単純でリアルなトリックである（「名高い密室事件の謎は実に簡単だった。子供だましかった (p.200)」）。また、探偵によって論理的に解明されるのではなく、犯人の告白によって明らかになる点が拍子抜けする<sup>31)</sup>。冒頭部分で、ベカスが密室であることを確認し、様々な仮説を丁寧に検討したのを思い起こすと、いかにも急いで幕引きをしたという感じがする。

処女作で見られた制約はどうなっているのだろうか。

外面描写は相変わらず淡白である。ベカス警部は事件直後に登場するが、「私服の小柄で頑健な男が先頭にやって来た (p.15)」とだけ紹介され、外貌は「太った顔に濃い口ひげにもかかわらず、お菓子をもらえない子供のように見えた。p.37」のような描写があるに過ぎない。

ただし、他の人物の視点を通して個性を素描しようとする試みは見られる。尋問相手の若い女優には「殺人犯を尋問している警察官のようにはちっとも見えない。学生に話しかける先生のような。 (p. 56)」という印象を与え、容疑者を追って乗り込んだラリサで知り合う女優には「あなた警官じゃないでしょ…いい人にみえるもの (p.161)」と評される。この女優はたいした役割もなく退場し、ベカスの性格付けのために登場したかのようである。

対して、相棒マクリスの方が、わずかながらも描写が詳しい。(上流階級の中にあってはマクリスも「不協和音」である。)

アテネ中の名士たちがそこにいた。男たちの黒服と手入れの行き届いた髪の間で、マクリスのタータン柄スポーツジャケット、身軽な長軀、櫛も入れない豊かな髪は不協和音を放っていた。いつものパイプをくわえ、聡明な目が金縁眼鏡の後ろで微笑んでいた。(p.11)

デリオスもレギュラー出演が確定したようで、外貌、住まい、家族にも言及されている。

眼鏡をはずして拭い、手の甲で疲れた目を押さえた。美しい目をしていた。藤色のような不思議な色で、純粋な心が浮かび出ている。…額の髪はかなり薄くなっていた。四十半ばだったがふけて見える。…眼鏡をかけ、金色と青色のアクロポリスの背景の空を見た。…母と子はずっと一緒に暮らしていた。(p.85)

この時点でも主人公の設定は揺れていたのだろうか。

ストーリーに無関係な要素を削ぎ落とすという点では、本作でも匿名の登場人物が多い。容疑者の隠れ家発見に手柄を立てる新聞社の若者は、ほとんど「助手」とだけ呼ばれ、ラリサ市で犯人に迫った警察官は、ベカスの年来の知己であるにもかかわらず、最後まで名無しの「巡査部長」のまま殺されてしまう。そこまで節約しなくてもと思うのだが、この点は変わらない。

一方、現実社会への言及については、変化が見られる。

「コロナキの犯罪」では、カイロで対独抵抗活動をする人物を裏切ったことが殺人の動機の一つになっていた。本作では、事件の発端が第二次大戦の占領期に遡ることが語られ、対独協力者に対する嫌悪感が前作よりもはっきりと示される<sup>32)</sup>。被害者ローザはイタリア諜報機関の隊長の情婦となり、後にはイギリス軍諜報員とも関係、戦争犯罪の裁判を巧妙に逃れた、と同時にドイツ軍にも追われながら親衛隊の将軍に取り入って身を護ったという風に、権力に巧みに寄り添いながら生き抜いてきた過去がある(第三章)。また、その夫は、テサロニキでユダヤ人をドイツ軍に密告し、民衆が飢えていた占領期に稼いだ人物(第十章)。容疑者の一人は、ドイツ軍に逮捕されかけた肉親の救援をこの人物に求めたが裏切られ殺されてしまったという恨みがある。

あいつはくずです。自分の母親だって売り飛ばすでしょう。賭博師、ドイツのスパイ σπιούνος、脅迫者。最初の生業といえばドイツ軍にユダヤ人を密告することでした (p.120)

マクリスの情報源であるバーテンは、占領下でドイツ軍公認のいかがわしいクラブを経営しており、解放後も裁判を逃れた、得体の知れない人物である。(それゆえ描写も長くなる。)

(マクリスは) その男の職業上の笑顔と、きれいに撫でつけた、光沢のある灰色の髪に目

を注いだ。驚鼻の浅黒い顔は花崗岩の彫刻のようだ。人が見とれるタイプ。いくつもの仕事をし苦境をくぐり抜けてきた奴。汚れた罪状は幾つかの国に跨っていることだろう。占領下でのドイツ軍との関係はすこぶる怪しい。解放後すぐの裁判では独軍協力者 δωσίλογος の嫌疑で裁判にかけられたが、難なく逃げおおせた。汚いが、魅力もある奴。(p. 58)

σπιούνος、δωσίλογος のような最悪の軽蔑語に象徴されるように<sup>33)</sup>、処女作より一歩進んで、第二次大戦という近過去の歴史背景が取り入れられている。

## 6. 埋もれた傑作「十三番目の乗客」(1962)

この作品は六十年代の初めに「アポイエヴマティニ」紙に連載されたが、なぜか完結後すぐには書籍刊行されなかった。九年後の1971年になってペルガミニ社が刊行、その後絶版になっていたのを、2012年にアグラ社がアポストリデイス監修で再刊した<sup>34)</sup>。マリスの最重要12作品の一つに数えられており、いわば埋もれた傑作である<sup>35)</sup>。

次々と殺人が起こるスリラー的要素と被害者達をつなぐミッシング・リンクを探るパズラー的要素を軸に事件が展開していく。以前にも増してテンポが速い。殺人事件が十件を超えても犯人の見当がつかず、最後に二人の容疑者が残るまで息つく暇を与えない。しかもその後、狡智に長けた犯人が正体を現すという離れ業が用意されている。

連続殺人ものらしく、被害者たちには個性（つまりは感情移入の余地）など与えられていない。外面描写もされず、人間関係にもほとんど触れられない。パズルの駒としての扱いである。

一方、ベカス警部の、頑固で昔堅気という性格づけは明確になっている。

ベカス警部はネクタイを緩め、顔の汗をハンカチでぬぐった。…

「こんなに暑いのにどうして上着を脱がないんですか、警部？」…

「どうして？」わけは言わなかった。馬鹿げたこだわりだが譲れなかった。上着なしに出歩くことなどないし、どんなに暑かろうとネクタイを取ることもない。「昔風の人間だな」と自分で思った。(pp. 24-25)

よく知られたベカス警部の欠点のひとつは頑迷ということだ。同僚は「頭が固い」と言い、好意を持たない者たちは「驢馬」と陰口を叩く。とにかく、眠そうな雰囲気、太った警部は一度頭に入ったことを簡単には追い払わない。(p. 54)

太った小男が帽子を手に戸口に立っていたが、殺人者に脅された者が待ち望んでいる「守護天使」には程遠かった。「ベカスです。」(p. 107)

謙虚な性格は健在であり、有能な仲間への畏怖は隠さない。

ベカスはマクリスを尊敬し恐れていた。善良な性格、強靱な知性、深い教養と完全なる道義心を尊敬し、ジャーナリストとしての嗅覚を恐れていた。(p. 88)

「コロナキの犯罪」「楽屋の犯罪」での捜査は苦難続きだったが、本事件でのベカスの失敗は作者によって厳然と宣言されてしまう。

またもベカスは敗れた。確信はしていたが立証できないまま、事件調書を検事へ送った。三十年間の警察人生で扱った最も深刻で最悪の事件、失敗した事件だった。(p. 233)

それでも、最後には狡猾な犯人と対決し、入り組んだ事件の謎解きをする姿は主人公であるといつて差し支えない。マクリスはよき相談相手の立場に退いている。

逆に、歴史的現実への言及は後退している。事件の動機を検討する際、占領期の恨みが浮上するが、即座に否定される。

「占領期」は悲劇、受難、憎悪を生み出していた。ドイツ軍に協力した者たちは犠牲者やその親族に復讐の念を呼び起こしたかもしれない。その逆もある。さまざまな抵抗組織は荒っぽく、戦争の熱気の中で非道な行為に走る場合もあった。(p. 66)

この後、占領期にアメリカへ逃れた富豪の話が絡んでくるが、歴史への言及というよりも、事件の端緒を求めて過去へ遡及するコナン・ドイル風の奇譚(「緋色の研究」「恐怖の谷」のような)の趣きがある<sup>36)</sup>。動機は結局のところ金銭にまつわるものであり、本作は、スリラー・パズラーに特化した娯楽作品になっている。

## 7. 後年のマリス、「恐怖の夏」(1971)

さらに十年近く経った七十年代初め、パパドプロス軍事政権の時期に、「アポイェヴマティニ」紙ではなく(同紙は発行部数を伸ばしていたのだが)、雑誌「エピケラ Επίκαιρα」に発表された作品である<sup>37)</sup>。

「十三番目の乗客」の結末で犯人に破れ、落胆し、退職時だとぼやいていたベカス警部は「個人の事件」(1964)ですでに年金生活に入っている<sup>38)</sup>。本作では冒頭、自分を頼って来た旧友の息子を守りきれず、彼が巻き込まれていた犯罪の謎を追って奔走する。

捕物劇、追跡を駆使し、「読者を楽しませる」という基本スタンスはここでも変わることはない。

ベカスは最初のページから最後まで出突っ張りで、間違いなく主人公となっている。退職したマクリスも登場(デリオスは既に個人)、どちらが主人公でもよさそうなものだが、ベカスを中心としたのには狙いがある。本作の見所が、

退職警官が公的権力の後盾なく、どこまで個人で事件に挑むことができるのかという点だからである。ベカスは自問する。

いったい俺は何をしようとしているのか？と自問した。以前ははっきりしていた。仕事だから。給料をもらっていたのだ。だが、今は？そして、なぜ？と考えた。怯える目で助けを求めてきた瘦せた若者のためか？そう、彼のためだ、と自分に言い聞かせた…いや、これは嘘だな、とつぶやく。若者のためじゃない。友人の息子の復讐をしようってんじゃない。それじゃ？むかしの仕事の習性か？猟犬は兎の匂いがすると心騒ぐということか。それも違う。…個人的な借りだろうか？そうかもしれない。嘲笑され、偽の電話を受け、腹が立ったからか。(p. 88-89)

最後の答えにもベカスは完全に納得したわけではないのだが、奮闘し続ける。(事件が解決しても、結局答えは出ない。)ここでは、探偵が自分の存在意義に悩むという、「コロナキの犯罪」や「十三番目の乗客」には見られなかったテーマが現れている。

真犯人はかなり早くに割れるので、謎の解明よりも罪ある者を逮捕できるのかがストーリーの主軸になる。狡猾な犯人は証拠を残さず、常にベカスの裏を搔き翻弄し続ける。事なかれ主義の元上司を無理やり説いてアリバイを調べさせたものの、政府の大物たちを利用した鉄のアリバイに突き当たり、無様に罵倒されてしまう。元同僚を巻き込んだ最後の張り込みでも怪しい動きが一切見られない。何度も面目を失い続け、このまま敗れ去るのだろうか。「コロナキの犯罪」から付き合ってきた読者ならば、冴えない風貌の家庭人、今では何の肩書きも持たずに奮闘する老探偵を応援しないわけにはいかないだろう。

上流社会を透かし見る描写は相変わらずで、不協和音たるベカスが登場するごとに入念な対比が挿入される。富豪の婦人を訪ねた際は「口髭に流行おくれの服、庶民的な格好のベカスが日頃歓迎されないタイプであるのは明らかだった。(p.39)」のに対し、留守番の掃除婦(庶民の側)には「ベカスの風采は彼女を満足させたようだ。(p.94)」と評される。

スニオン岬の豪華な別荘で暮らす容疑者たちは一片の同情も掛けられないように描かれている。だが、これに加えて、本作で繰り返し語られるのは世代間の格差である。ベカスの亡き親友の息子アレコスも同情に値する被害者ではなく、金にあざとい新世代の若者として登場する。

ベカスは怒っていた！黄金の鎖を首にかけ、長髪で、簡単に泥棒をするような小僧だからではなく、この小僧が、かつて兄弟以上に愛した親友の息子だったからである。…(若者は)火をつけ、箱とライターをポケットに戻した。タバコはアメリカのマルボロ、ライター



一は金ぴかのダンヒルだった。「金ぴか物にかぶれてるわい」とベカスは思った。(p. 12)

そもそも当節の若者全体が、理解不能で受け入れがたい世代としてベカスには映る。

ベカスの目には彼らが同じように映った。ちょうどヨーロッパ人の目に中国人が同じに映るように。同じ奇抜な服、同じ髪型、同じやり方、同じスタイル…向かいに座り、老警部に何が見えているかなどお構いなしの、若い美しい二人の娘を見ながら、なぜ太腿を露わにするのだろう、とベカスは思った。無用な様式など必要としない無邪気な若さゆえか？それとも当局の言う「道徳の墮落」というやつか？後のほうだろう、と思った。しかしながら、夏の灼熱の中で上着もネクタイも取らない自分のこだわりは、無意味な様式への馬鹿げた執着だと心の奥底では気がついていて、俺は古い世代の人間だ。しかし、もしかすると、この子たちは真っ当な新しい世代の住人ということになるのか？ (p. 26)

「道徳の墮落」は当時の軍事政権の常套句を当てこすっているのだろう。ただし、当のベカスは政治には無関心であり、昔かたぎという基本的設定は「コロナキの犯罪」以来一貫している。

対照的に、伝統的で心安らぐ家族関係も頻繁に語られる。ベカス夫人は、あいかかわらず名前がないものの、無条件に夫を支え続ける。

「お友達の息子さん、どうしたの？」と尋ねた。ベカスが現役だったころ決して事件のことは訊かなかった。だが今夫は年金生活、起きているのは個人的な出来事だ。(p. 20)

これに報いるべく、ベカスが映画好きの夫人につきあって、戸外の映画場へ行く場面も挿入される。

「楽屋の犯罪」に見られたような過去の歴史への言及に代わって現れるのは、現代の硬直した官僚主義、強大な権力の脅威である。官僚主義に凝り固まった警察主任（名前は呼ばれない）は、ベカスとの対比の中で登場する。その描写は明らかにジゴロのジョーやカルネジスと同類である。

二人はあらゆる点で違っていた。考え方、仕事のやり方、性格。向かいあって座ると外見の違いは顕著だった。警察主任は痩せていて、身だしなみは優雅だ。淡い色の夏服をまとった身体の線は非の打ち所がない。灰色がかった髪が陽に焼けた顔を浮立たせ、銀行か大企業の管理職を思わせた。向かいあったベカスと言えば、いつものポロシャツを脱いで、出来合いの晴れ着を着た小商店の主という風情だった。(pp.50-51)

主任は仕事には忠実、とベカスもある程度は認めるのだが、その忠実というのも上からの命に対してということで、圧力を受けてはベカス家をわざわざ訪れ、手を引くように脅す人物である。

社会的地位のある容疑者の方は、狡猾に立ち回り尻尾を出さないだけではな

く、アリバイ工作には内務省の大臣をも利用する。さらには、巧妙に警察の上層部やベカスの娘（「コロナキの犯罪」で十六歳だった）の夫がようやく雇ってもらった会社へも圧力を掛け、夫は首になってしまう。

謎の解明を身上とするミステリとして見るならば、「筋立てには興味を惹くものがない」ことになってしまうのだが（Αποστολίδης 2012:324）、世代間の格差や権力と個人の関係などをめぐる作者の心情が、50年代の作品よりもずっと饒舌に吐露されている。

## 8. 娯楽の奥から滲み出したもの、「虹作戦」（1966）

時間は前後するのだが、1966年に書かれた「虹作戦」を見てみよう。「アクロポリス」紙掲載、次いでアトランティス社から出版、と他の作品同様の流れで世に出たが、ベカスものではなく、警察ミステリでさえない。第二次大戦が舞台の冒険ものである<sup>39)</sup>。しかしながら、謎解き小説としての制約がない分、マリスは自らの心情を、従来以上に作品中に吐き出している。

戦局が悪化し、中部テサリア地方にもドイツ・イタリア占領が及んでくる。ある夜カランジス老は息子フォティスとともに、パラシュートで落下した英国兵サムを助ける。極秘任務を手助けしてやるが、カランジスは逮捕され、公開処刑まで五日間の布告が出る。父を救うべくフォティスが奔走するのが前半（第一章～第五章）の主軸。

後半では、サムの代行でアテネへやって来たフォティスが、対独抵抗組織に依頼された任務をどう遂行するかが見どころとなる。親独・反英のふりをして敵に接近すべしという難題を背負わされ、二重スパイの役割をする中で主人公のアイデンティティーは激しく揺さぶられる。ドイツの兵站線となっていたゴルゴポタモス橋爆破作戦（1942年）の史実がストーリーに絡む。

メテオラ巨石群の麓での銃撃戦、敵味方に本心を明かせない葛藤、見えざる敵への疑心、舞台は戦時中ながらもマリス流の娯楽スリラーで読ませてくれる。

注目したいのは、父子間の情愛が濃密に描かれる点である。父が拘束された後、幼年期に父に守られた思い出が湧き出してくる。第五章「父と子」では賄賂を使って捕われの父と再会するが、処刑を控え不安な父を見て息子の心は崩れかける。

（父は）これまで見たこともないほどぼろぼろで髭も伸び放題だった…今、父がどんなに隠そうとしても、息子には見えていた。父カランジスは怯えていた。（p.75）

拘置所での会見さえ描かれなかった「コロナキの犯罪」を代償するかのよう

である。フォティスは主人公であるが、自分が英雄ではないことを常に実感し、拷問の記憶と裏切りの自責に苛まれる。

自分はヒーローじゃない。ドイツ人の前に立つ場面を想像すると背中に震えが走った。実は僕が…それに続くことを想像し凍りついた。ドイツの警察の拷問やその器具のことは聞いていた。自分は全部しゃべってしまうだろう。やるべきは、ただ父を中から救い出し、鞆のことは隠しておくことだ。ただ、それもできればの話だ。責めの痛みには耐えられず鞆のこともしゃべるかもしれない。もちろん、それで全ての試みは失敗するだろうし、新たな犠牲が出るかもしれない。でも自分はヒーローじゃない。恐れも感じるし、ただ父親を救い出したいだけの人間だ。(p.85)

初めはとにかく父を救いたい一心であったが、やがて他の捕虜の危険にも思い至り、却って苦悩は深まる。

そして他の人たちは…父を救おうと苦悩するあまり、自分がどれほど利己的だったかに初めて思い至った。この恐怖の時間の間にドイツ軍に自首しようとも決心していた。彼の心を占めていたのは父の運命だけだった。しかし、他の人たちはカランジス老よりも潔白だ、パラシュート兵や秘密任務のことなど知らないし、もとより何の関係もないのだから。父の死が彼に責任があると言うのなら、他の人たちの死も彼の責任だろう。(pp.93-94)

最終章は戦後の解放された明るい雰囲気が始まるのだが、ドイツの強制収容所から帰還したフォティスの中には虚無感しかない。任務を遂行し勝利には貢献したが、自分は一つの駒に過ぎなかったことへの落胆、それに結局最愛の人々を失ってしまった傷を抱えている。占領は終わったが、内戦で殺し合いが続き、中盤で登場したある人物は、今では同国人から敵として追われている。

占領下が舞台の本作には、容疑者の群れに代わって様々な敵が現れる。フォティスが接近するドイツ人少佐を始め<sup>40)</sup>、情報を流して小金を稼ぐ伍長や主人公を拷問する「機械男」などドイツ軍は典型的な悪役の扱いだが、同じ占領軍でありながらドイツ兵を嫌うイタリア兵、イタリア軍に協力しつつ山村を強奪するヴラフ人兵、など多彩な立場の人物が交錯する。対独協力者のギリシャ人もいたところに顔を出す。闇市で儲け哄笑が止まらないギリシャ人男女、主人公の陰気な監視役、ゲシュタポの手先となる裏社会の非情な男。独伊英とその時々力ある者に取り行って生きのびる娼婦ポーピは「楽屋の犯罪」のローザの流れを汲むが、それ以上にたくましい。主人公を助けてやる一方で、戦後は勝者たるイギリス兵と腕を組み、アテネを申し歩いている。

解くべき謎も暴くべき犯人もないだけに、作者は饒舌だ。謎と殺人犯を追ってただ奔走していたディミトリス青年に比べ、父への思慕、臆病、絶望、ア

イデンティティーを巡る苦悩、とフォティス青年の心の葛藤が存分に語られる。

## 9. 結論

ヤニス・マリスは、自らの歴史認識や政治的信条をあえて封印し、読者サービスに徹することで、通俗ミステリを広く社会に流通させた。処女作「コロナキの犯罪」(1953)、第二作「楽屋の犯罪」(1954)は、登場人物たちの秘密、巧妙に隠された犯罪者、事件の推理解明を軸に据え、追跡劇、捕物劇などを頻繁に挿入しながら、テンポの速いストーリー展開によって魅力的な娯楽読物となっている。そこでは、家族の愛情、政治的信条など、娯楽性を損なうかも知れない要素は切り捨てられている。「楽屋の犯罪」では占領期の背信行為が事件の遠因になっているが、「十三番目の乗客」(1961)ではその切り捨てが更に進み、パズラー・スリラーに特化した作品に仕上がっている。

これに対し、後年の作品では、切り捨てられてきた要素の比重が大きくなっている。「虹作戦」(1966)では父子の愛情、対独協力者への嫌悪、「恐怖の夏」(1971)では探偵の存在意義や政治的権力との個人の戦いがストーリーの中に滲み出てくるのである。娯楽作品の提供という狙いは変わることがないが、封印してきたものが溢れ出てきたかのようである。

## 注

- 1) 同クラブのホームページで詳しい活動を見ることができる。  
<https://crimefictionclubgr.wordpress.com/welcome/>
- 2) 『マリスこそギリシャ・ミステリ文学の父だよ。』数か月前私たちのインタビューの中で、ペトロス・マルカリスは自分にその称号が与えられるのを否定して、こう答えた。」(Κουζέλη, 2011/6/4)。『我々は皆ヤニス・マリスの子供だ。』こう述べるのは、現代ギリシャ・ミステリ「四大作家」の一人フィリポス・フィリップ。」(Κουλετάκη, "Αστυνομικό μυθιστόρημα VIII: Νούαρ α λα Ελληνικά")。
- 3) ヴィジイノスの作品は数少ないながら、頻繁に「謎」を取り入れている(Beaton, 1994:74)。
- 4) Αποστολίδης, "Θέμα Ορισμού: Η Αστυνομική Λογοτεχνία", Φιλίππου "Ο Γιάννης Μαρής, η εποχή του και η αστυνομική λογοτεχνία" 他参照。但し今日、国産ミステリ第一号は1913年2月14日雑誌「ギリシャ Ελλάς」に掲載された短編「あるトリック Ενα τέχνασμα」、中編は同年12月19日から三ヶ月間同雑誌に連載された作者不詳「シャーロック・ホームズ、ヴェニゼロス氏を救う Ο Σέρλοκ Χολμς σώζων τον κ. Βενιζέλον」が最初とされる。後者は1913年第一次バルカン戦争後の講和会議のためロンドンを訪れたヴェニゼロス

- 首相を、ホームズがテロリストの脅威から護る、というもの。テキストは Ανώνυμος (2013) *Ο Σέρλοκ Χολμς σώζων τον κ. Βενιζέλον*, (επιμ. Σταύρος Πετσόπουλος) Άγρα.
- 5) 「プシヒコの犯罪」の最新テキストは Νιρβάνας, Παύλος (2006) *Το έγκλημα του ψυχικού*, (επιμ. Γιάννης Ράγκος) Ίνδικτος, 「Γ.マリスは最初からミステリを書くつもりがあったが、Π.ニルヴァナスはそうではなかった (p.15)」
  - 6) Κορίνης (2010).
  - 7) Κοντοπίδου (2009:48).
  - 8) 編集者として、著名な四人の三十年代作家(ミリヴィリス、カラガツィス、テルザキス、ヴェネジス)のリレー合作「四人の小説」(1958)を実現させた。この企画はアガサ・クリスティ達の連作「漂う提督」(1931)をヒントにしたらしい (Petroff, 1996:56)。
  - 9) アンドニス・サマラキスは「きず Το λάθος」(1965) が創元推理文庫に収録されているが、ミステリ文学の文脈で語られることはない。ディミトリス・ハジスには「探偵 Ο Ντέτεκτιβ」(1963)という短編があるが、殺人事件の犯人探しと見せて、実は時流に取り残されていく主人公の悲哀を描く。
  - 10) 50年代の初め、いくつかの新聞のために使っていたフランス風の筆名 Ζαν Μαρού (仏人作家ジル・マリと仏人俳優ジャン・マレーの名をもじって作った) をギリシャ風にしたものと言う (Αποστολίδης, 2012:121)。
  - 11) 「アポイエヴマティニ」は一年前に創刊されたばかりだった。「アクロポリス」の方は 1883 年以來の歴史があり、福音書の口語訳を掲載し 1901 年の抗議暴動(「福音書事件」)のきっかけを作ったことでも知られる。
  - 12) 新聞掲載時の題名は「キフィシアの夜」。マリスの作品の多くが書籍出版の際、題名を変更している。本稿では最終的に書籍で使われた題名を用いる。
  - 13) Αποστολίδης (2012:21-26) .
  - 14) ミステリ以外にも恋愛小説や歴史小説も書いている。「楽屋の犯罪」を連載中、歴史小説「クレタの血まみれの婚礼」も同時に執筆連載していたが、評判のよい「楽屋の犯罪」によって、メインページを奪われたらしい (Κεχαγιόγλου, 2013)。
  - 15) 最初の映画化作品は 1958 年の「列車の男 Ο άνθρωπος του τραίνου」。「コロナキの犯罪」は 59 年、「楽屋の犯罪」は 60 年に映画化された。
  - 16) 筆者は不明なことにこの部分を読みとばしてしまったが、かえって楽しむことができた。
  - 17) 1970 年の「第三の真実」(Κακούρη 2012:12 に引用されたもの)。
  - 18) 親だけではなく、左翼系の雑誌も(60年代までは)ミステリは若者に有害とみなし、掲載しなかったらしい。Κορίνης (2010), Φιλίππου (2015/5/31), Καλφόπουλος (2013:314)。
  - 19) 書籍では八～十五章構成になるが、新聞連載では(本で言えば)3頁相当の短い章が百回前後続く。アグラ社「めまい」(2013)は90章の新聞連載形式を再現しており、当時の読者の気分(次回が待ち切れない/頁をめくる手が止まらない)が味わえる。
  - 20) ベカス警部が最初から最後まで現れ活躍する作品は意外に少ない。Αποστολίδης (2012:29)によれば、46長編作中、ベカスが登場するのは約半分の20作品に過ぎず、

そのうち2作品は最後で僅かに姿を見せ、10作品は中段から現れるのみ。初めから登場するのはただ9作品（「コロナキの犯罪」、「楽屋の犯罪」、「殺人者はタキシードを着ていた」、「個人の事件」、「めまい」、「十三番目の乗客」、「アフロディテの手」、「恐怖の夏」、「誘拐」）だけだという。

- 21) Αποστολίδης (2012:33)もこの点を指摘する。
- 22) この趣向の命名はジョン・ディクスン・カー「剣の八」（加賀山卓朗訳、ハヤカワ・ミステリ文庫、2006）の霞流一氏の解説からお借りした。
- 23) 第四章から現れるカレルギス警部。
- 24) アグラ社刊行の「十三番目の乗客」などには、新聞連載時の Μ. Γάλλιας, Φ. Δελλής らによる挿絵が復刻されており、小太りでがっしり型、口髭、帽子、眼鏡、常にネクタイを締めた庶民派ベカスの風貌が見られる。
- 25) 「マリスの世界は…社会的対立、内的衝突に満ちている。…上流階級に対する庶民（などの対立）」（Καλφόπουλος, 2013:316）。また、アポストリディスは作品の根底に（庶民の）「覗き見趣味 ηδονοβλεπτικά」があると指摘（2012:89）。
- 26) 「（マリスは）内戦や右派政権による左派追放の話題は避けていた」（Tonnet, "Το αστυνομικό μυθιστόρημα στην Ελλάδα"）。「政治と左翼は念入りに作品テーマから排除され…炯眼な読者か疑い深い当時の検閲者のみが、作家が過去に対して『眼を閉ざしている』ことを行間から読み取った」（Καλφόπουλος, 2013:313）
- 27) ミステリが逃避の文学であり現実の社会問題と無関係、ということはある得ない。現代のミステリ作家たちは、これらの問題を作品の中に正面から取り入れている。例えば、1955年コンスタンチノーブルのギリシャ人地区で起きた暴動（九月事件）に取材したペトロス・マルカリス「三日間」、移民の増加による伝統的な村落共同体の変容が犯行の背景となるアシナ・カクリ「外人」（ともに Πέτρος Μάρκαρης, Ανδρέας Αποστολίδης και άλλοι, 2007, *Ελληνικά εγκλήματα*, Καστανιώτης 所収）。
- 28) マリス作品では、犯罪動機は個人的（愛憎、金銭、脅迫への対抗つまり自己防衛）であり、政治的犯罪、性的倒錯、警察の腐敗、大企業間の競争、国家犯罪のようなテーマは欠けている（Αποστολίδης, 2012:12, 16）。これらはまさに現代ミステリが扱う対象である（Μάρκαρης, 2011）。
- 29) 原題は「舞台袖」の方が近いが、事件は舞台の脇に位置する「楽屋」καμαρίνιで起きる。
- 30) マリスは演劇の台本も手がけ、二本が上演されている（Χατζηφώτης, σ.64）。
- 31) 我が国の島久平の作品に類似例が見られる。有名なジョン・ディクスン・カー「三つの棺」の密室トリック分類では「遠隔殺人」に当たるだろうか（加賀山卓朗訳、ハヤカワ・ミステリ文庫、2014）。「三つの棺」のギリシャ語版翻訳者でもあるネオクリス・ガラノプロスは「ジョン・H・ワトスン博士の筆による緋色の講義」なるホームズ贋作の中で、ホームズの語る密室トリック分類 (!) の一つ「時間の錯誤を用いるもの」に「楽屋の犯罪」の例を加えている（Γαλανόπουλος, "Μια διάλεξη για το άλικο, υπό δρος Τζων Χ. Γουότσον, Μ.Δ. "）。

- 32) Αποστολίδης (2012:145) もこの点を指摘。
- 33) δωσίλογος は 19 世紀の新造語で、元来は「(決算) 報告の提出者'renditore di conto」(Στέφανος Κουμανούδης, *Συναγωγή Νέων Λέξεων*, 1900, σ.304 に 1840 年の例を採録)。独軍占領期に「敵の協力者、裏切り者」の意味を持つようになった (Γ. Μπαμπινιώτης, *Ετυμολογικό λεξικό της Νέας Ελληνικής Γλώσσας*, 2010, σ.394)。σπιούνος はイタリア語 *spione* 「スパイ」の借用。18 世紀初めの辞書にすでに見られる (Alessio da Somavera, *Tesoro della Lingua Greca-volgare ed Italiana*, 1709)。
- 34) 同じような経過で、2000 年代になって書籍出版されたものに、「アフロディテの手」「めまい」「夜の婦人」「最後の夜」がある。
- 35) 「十三番目の乗客」巻末付録に付されたマリスの最重要作は以下の 12 作品 (p. 248)。1 「コロナキの犯罪」、2 「楽屋の犯罪」、3 「殺人者はタキシードを着ていた」、4 「夜の電話」、5 「赤い壺」、6 「ミコノス島の休暇」、7 「聖山の冒険」、8 「白い岩の秘密」、9 「十三番目の乗客」、10 「恐怖の夏」、11 「第三の真実」、12 「ジョン・アヴラキオティスの失踪」。このうちベカスが活躍するのは、1、2、3、9、10。
- 36) アποστολίδης の言うドイル的要素 (Αποστολίδης, 2012:256) はこの点を指す。
- 37) 1970 年代の初め、マリスは例外的に雑誌「エピケラ」に四編書いている (「Πυτυα της Μικτικής」「恐怖の夏」「危険な遊戯」「第三の真実」)。
- 38) 実はこのぼやきは早くも第二作「楽屋の犯罪」から始まっている (p.197)。
- 39) マリスの全ミステリ作品を論じるアποστολίδης は、本作品を十行ほどで片付けている (Αποστολίδης, 2012:307)。
- 40) 「Πυτυα της Μικτικής」(1971) のドイツ人「教授」に繋がる。この作品では、戦後、美術品強奪を企てる戯画的な敵役。

### ヤニス・マリス作品の使用テキスト

*Έγκλημα στο Κολωνάκι*, 2012, Ατλαντίς / Το Βήμα.  
*Έγκλημα στα παρασκήνια*, 2012, Ατλαντίς / Το Βήμα.  
*Ο 13ος επιβάτης*, 2012, Άγρα.  
*Το καλοκαίρι του φόβου*, 2012, Ατλαντίς / Το Βήμα.  
*Επιχείρηση «Ουράνιο Τόξο»*, [---], Ατλαντίς  
*Το χαμόγελο της Πυθίας*, [1982], Ατλαντίς  
*Τίγγος*, 2013, Άγρα.

## 参考文献

- Αποστολίδης, Ανδρέας (2012) *Ο κόσμος του Γιάννη Μαρή*. Άγρα.
- Αποστολίδης, Ανδρέας (---) "Θέμα Ορισμού: Η Αστυνομική Λογοτεχνία". *Ε.Λ.Σ.Α.Α.*
- Αποστολίδης, Ανδρέας κ.ά. (2012) *Η επιστροφή του αστυνομικού Μπέκα, Ο ήρωας του Γιάννη Μαρή σε νέες περιπέτειες*.Καστανιώτης.
- Γαλανόπουλος, Νεοκλής (---) "Μια διάλεξη για το άλικο, υπό δρος Τζων Χ. Γουότσον, Μ.Δ." *Ε.Λ.Σ.Α.Α.*
- Κακούρη, Αθηνά (2012) "Η δική μου επιστροφή στον Γιάννη Μαρή", In Ανδρέας Αποστολίδης κ.ά. (2012) σσ. 9-14.
- Καλφόπουλος, Κωστας Θ. (2013) "Ο ιλιγγιώδης Γιάννης Μαρή, επίμετρο," In *Υλιγγος*, σσ. 311-317.
- Κεχαγιόγλου, Ελένη (2013) Ο πρωτοπόρος κύριος Γιάννης Μαρήs. dim/art. (<http://dimartblog.com/2013/11/13/yiannis-maris/>)
- Κοντοπίδου, Άννα (2009) *Πτυχές του αστυνομικού μυθιστορήματος στην Ελλάδα το δεύτερο μισό του 20ου αιώνα*. Αθήνα.
- Κορίνης, Τζίμμυ (2010/7/23) "Στην εποχή της Μάσκας." *ARTAPRESS* Τεύχος 53.
- Κουζέλη, Λαμπρινή (2011/6/4) "Γιάννης Μαρήs: Ο «πατριάρχης» της αστυνομικής λογοτεχνίας". *Το Βήμα πολιτισμός*.
- Κουλετάκη, Νίνα (---) "Αστυνομικό μυθιστόρημα VIII: Νουάρ α λα Ελληνικά". ([https://eglima.wordpress.com/2006/08/27/astinomiko\\_8/](https://eglima.wordpress.com/2006/08/27/astinomiko_8/))
- Μάρκαρης, Πέτρος (2011) "Σημειώσεις για το αστυνομικό μυθιστόρημα". (<http://www.apiliotis.gr/ArticlesList.aspx?C=366&A=362>)
- Φιλίππου, Φίλιππος (2014/7/20) "Ο Γιάννης Μαρήs ως δημοσιογράφος". *Ο αναγνώστηs*.
- Φιλίππου, Φίλιππος (2015/5/31) "Όταν η Αριστερά γύριζε την πλάτη στην αστυνομική λογοτεχνία." *Αυγή*.
- Φιλίππου, Φίλιππος (---) "Ο Γιάννης Μαρήs, η εποχή του και η αστυνομική λογοτεχνία". *Ε.Λ.Σ.Α.Α.*
- Χατζηφώτης, Ιωάννης Μ. "Μαρήs Γιάννης", In *Μεγάλη Εγκυκλοπαιδεία της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας* (του Χάρη Πάτση) τόμ.10, σσ. 64-78.
- Beaton, Roderick (1994) *An Introduction to Modern Greek Literature*, Clarendon Press.
- Petroff, Saskia (1996) "Petite enquête sur les traces de la littérature policière en Grèce," *ΑΕΡΗΔΕΣ* 1 pp.52-61.
- Tonnet, Henri (---) "Το αστυνομικό μυθιστόρημα στην Ελλάδα, από το 1995 μέχρι σήμερα." (μετάφρ. Νίνα Κουλετάκη). *Ε.Λ.Σ.Α.Α.*
- Ε.Λ.Σ.Α.Α.*は「ギリシャ・ミステリ作家クラブ」のHPに掲載されたもの（注1参照）。



## **Yannis Maris, “Father of the Greek Crime Novel”: Charms and Changes in His Works**

**Takashi TACHIBANA**

It is broadly accepted that the genre of the modern Greek crime novel was established by Yannis Maris (1916–1979). Although some literary masters in the 19th century incorporated some factors of mystery into their works, the status of Maris as the “father of the Greek Crime Novel” is undeniable in the quality, quantity, and influence of his works.

This small study attempts to analyze what kinds of charms in his writings attract readers. Close reading his major novels, *Crime in Kolonaki* (1953), *Crime on the Backstage* (1954) and *The 13<sup>th</sup> Passenger* (1962) indicates that the succinct style without lengthy descriptions and the common heroes seen in daily life contribute to produce readable works. Besides, for the same purpose, it is consciously avoided to introduce factors which might hinder comfortably reading, such as family affections unrelated to the main story or historical/political issues at the periods.

The study argues that the works in Maris’s later period (the 1960s–1970s) underwent certain changes in that previously rarely expressed aspects came to the fore, although the basic function of entertainment has been consistently retained. In *Summer of Terror* (1971), for example, the writer comments on the generation gap and police abuse of power.

Finally, *Operation Rainbow* (1966), regarded as an adventure romance rather than a crime novel, is worth analyzing because it exemplifies more directly the writer’s views on human relationships, such as father–son affections, and historical events such as the German Occupation.